

もう1人の野原一家

ソーパトリック

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし転生した主人公がクレヨンしんちゃんのしんちゃんの双子の弟だったら

目次

家族紹介	1
ななこお姉さんが来た	4
北海道へひとつ飛び前編	9
北海道へひとつ飛び後編	14

家族紹介

オレは、野原 潤

名前でわかる通りオレは「クレヨンしんちゃん」の世界に転生した
ここで家族を紹介します

野原 じゅん 5歳 5人家族で次男 幼稚園生

野原しんのすけとは二卵性の双子であり似ていない

容姿は「メジャー」の吾郎に似てイケメンである

じゅんは4歳の時まで自分がここがアニメの世界だと気がつかなかつたがある日じゅんはヒロシの靴の匂いを嗅ぎ、気絶し高熱をだし前世があることがわかった。じゅんはそれ以降ヒロシの足にトラウマ有り

転生者であるのだが前世の親などの記憶がないがアニメの「クレヨンしんちゃん」は少し覚えている。けど一般常識はわかる

野原家の唯一の常識人であるのだが、思ったことを口にだすためかなり毒を吐く、しかも言っている本人は無自覚。

しんのすけやヒロシと同じくお姉さん好きではあるがしんのすけみたいに表にはださない

野原しんのすけ 5歳 5人家族で長男 幼稚園生

下膨れ気味の輪郭に、太い眉毛、丸刈り頭が特徴

一人称はオラ

しんのすけは美男子だと思込んでいる

じゅんからは兄とは呼ばれておらず「しん」と呼ばれている

かなりの能天気でマイペースな性格。基本的に周囲の事はほとんど考えておらず、周囲に散々迷惑をかけても当人には自覚がなく、あたかも他人事のように済ませるなどのケースが数多いがじゅんにたまに怒らせ毒を吐かれ、かなり凹んだこと有り。

かなりのお姉さん好きでよくナンパする

じゅんとはかなり仲良く、いつも一緒に遊んでいる

野原ひろし 35歳 5人家族の大黒柱？サラリーマン

じゅんからは「父ちゃん」と呼ばれており家族の中では1番発言力が弱い。

子煩悩そしてお人好しな性格、厄介事や無茶振り、面倒事を押し付けられたりしても困惑したり文句を言うことはあっても無下に断る事はせず、大抵は引き受けている（もしくは引き受けざるを得なくなる）事が多い。また、みさえと同様におだてに弱く乗りやすく、家族をはじめひろしの人柄をよく知る人物からは若干軽んじられたり良いように扱われる。けどじゅんは優しいと知っているので大抵はひろしの味方である

髪型はややくセのついた短髪。最近では禿げあがりを感じており育毛剤を買ってこそつり付けている

家に帰ってくると足がくさいためじゅんにすぐ風呂に入れと言われる

入らないと無自覚で毒を吐くため、素直に従っている

野原みさえ 29歳 5人家族のボス 専業主婦

じゅんからは「母ちゃん」と呼ばれており家族の中では1番発言力が強い！

ボリュームのあるパーマヘアであり体重や体脂肪率を言うときすぐ怒る

個性的、時に母性的であるが、基本は“短気”と“見栄っ張り”と“ケチ”の三拍子を備えた利かん気で子供染みた女性である。自分の感情の赴くまま、しんのすけとひろしに容赦なく制裁を加えたり（よくしんのすけとひろしにげんこつおよびグリグリ攻撃をしている）、ひろしを完全に尻に敷いていて、しんのすけとひろしは基本的にみさえに頭が上がらない。一方で、ひまわりとじゅんに対しては打って変わって寛容である

一時期じゅんを芸能界に入れさせようとして、じゅんは目立つことがあり好きじゃないため嫌がり、無理矢理みさえは入れようとしたがじゅんはみさえの弱み吐き、みさえはかなりダメージを受けた。

ななこお姉さんが来た

じゅんが家でゴロゴロしているとじゅんの母みさえがしんのすけに

「こらーっ待ちなさい、今日のシロのおさんぽはしんのすけの仕事でしよ!!?」

じゅんとしんのすけはシロを拾ってからみさえにちゃんと世話をするとという条件で飼える事になり、じゅんとしんのすけは散歩を毎日交代ずつするはずだったのだが、しんのすけは3日ももたずぼぼじゅんがシロの散歩に行くのだ

「あ、母ちゃんそしたら俺がいくよ」

「潤はいかなくていいのよ!たまにはしんのすけにいかせなさい」

「いいよ!別に俺シロの散歩好きだし」

オレは玄関に行き靴を履いて外に出てるとリードを持ったシロがいた

「じゃあいくか!シロ」

「ワン!!?」

家から出ると綺麗なお姉さんを見かけた

「あれ?ななこさん?」

「じゅんちゃん!!?じゅんちゃんのお家ここだったのね」

ななこさんとの馴れ初めはオレとしんのすけが散歩しているとしんのすけの目にゴミが入りその時目のごみを取ってくれたのがななこさんなのだ。それ以来しんのすけはななこさんに夢中である

するとななこさんと話していると家からしんのすけと母ちゃんの言い合いが始まり、家の外にいる2人にまで聞こえた

「あつかんべくおしりぺんぺん」

「のヤロく親に向かってその態度・・・待ちやがれ」

「はあく。すみません騒がしいですよね」

「ふっふっ賑やかでいいじゃない」

しんのすけはみさえから逃げ、家の外へ逃げたらそこにはまだ散歩

に行っていないじゅんとシロとしんのすけの夢中のななごさんに気づいた

「な ななこおねえさん・・・」

しんのすけを追いかけたみさえもななこの存在に気づいた

「あつあなたは確か以前しんのすけの目のゴミを取ってくださいっ
た・・・」

「はじめまして、女子大生のななこです。じゅんちゃんとしんちゃん
のお母さん？」

じゅんはななこの前でも猫をかぶらず普通に「はい、オレの母ちゃん
です」と答えたが猫被りのしんのすけは「はい！ボクのおかあさん
です」

そのしんのすけを見たじゅんは慣れたのか苦笑い、みさえは「ぼ、ボ
ク・・・!?おかあさん!」しんのすけが普段は使わない言葉を使った
のでみさえは鳥肌が立ち、引いた顔をしていた

「ウチの子達がお世話になったお礼をしたいんですが、今度の日曜日
にウチで一緒にお食事をしませんか？」

「そんなお世話だなんて・・・」

しんのすけとじゅんはナイスだみさえと心の中で思ったがななこ
さんは断りそうだったのでしんのすけとじゅんは頷きあつて

「そうですよ!!?手抜き料理しか作れませんが大事な兄を救ってくれ
たお礼をさせてください」

「オラあん時おねいさんがいなかったら死んでたかもしれない、だ、だ
からお食事がぜひお礼をしたいのです」

「くそう、ほんとのことだから何も言えない。しんのすけ日本語メ
チャクチャ」

「そんな大げさな 分かりましたせつかくだからお邪魔させても
らいます。」

しんのすけはそれを聞き体が浮き、じゅんは顔には出していないが
喜んでいた

「じゃ私はこれで」

「じゃ日曜日お待ちしています」

「ボクはこれから犬のさんぽですのでそこまでいっしょに」

と言ってしんのすけはじゅんからシロのリードを奪い、ななこさんと一緒にいこうとしたがシロはじゅんの元を離れず、しんのすけはななこさんの元にはいけずみさえに捕まり、さっきのお仕置きを受け。その間にじゅんはしんのすけからシロのリードを奪い返し「ななこさん途中まで一緒なので一緒に散歩しましょう」と言い、ななこさんとシロはしんのすけを残して散歩に行った

「ぬおおー。弟のくせに〜」

—————当日の朝—————

じゅんが目を覚ますとしんのすけが自分のおもちやを片付け、掃除機をかけていた。一瞬夢かと思ったが隣にいた両親も目を擦りみさえは「うそ・・・信じられる?」と夫であるひろしに聞きひろしもまた「写真を撮つとくか・・・」と2人や・弟のジュンも寝起きだったのだが目が一瞬で覚め、3人はありえないと思いつながらしんのすけの奇行を見ていた

しんのすけはその後風呂嫌いなしんのすけがシャワーを浴びドライヤーをかけみさえの高い香水おまたにかけ七五三の時に着る洋服を着て待機していた

「ねえおねいさんまだあ?」

「来るのは12時よまだ3時間もあるわよ」

「よーし」

「時計を進めたってムダよ」

12時ななこさんが来る時間ぴったりに家のチャイムがなった

「おじやまします」

「こんにちは。ななこさん」

ななこは家に入ると3人が出迎えてくれたのだが昨日誘い喜んでくれたしんちゃんがないのでじゅんに聞いてみた

「ねえじゅんちゃん。しんちゃんは?」

「待ちくたびれて・・・」

じゅんちゃんがりビングに連れてもらおうとそこにはいびきをかいて寝てるしゅんちゃんがいた

「朝5時から起きてたみたいで」

しゅんちゃんをじゅんちゃんが起こそうとしたが起きなく。キッチンで食事することになった、キッチンにはでかいテーブルがあり大人用の椅子が3つ、子供用の椅子が2つあり大人用の椅子が子供の椅子に挟まって3つ並び、もししゅんちゃんが起きてたらしゅんのすけ、ななこ、じゅんの順に椅子に座る予定だったらしい

「じゃあななこさんこの椅子に座ってください」

じゅんは椅子を引きななこさんを座らせ、自分も自分の椅子に座ろうと思ったが

「じゅんちゃん、ここにすわって」

ななこさんが自分の膝の上をぼんぼんと手を叩きオレを座らせようとするが

「オ、オレは自分の椅子があるので大丈夫「おねがい」・・・はい」

じゅんは一応前世を含めて立派な成人な気持ちなどで膝の上に座ることに抵抗したが

ななこさんに涙目でお願いされたら断れるわけないでしょ!!?と心の中で思いしゅんがななこさんの膝の上に座った

「(ふっふっ。いつもはなんな同級生と話してるような気分だけど・今見ると耳を真っ赤にしてかわいい)はい。あーん。」

ななこさんは箸をもって料理をつまみオレにあーんをしてきた

「じ、自分で出来ます!!」

「ダメ。ほらあーんして」

じゅんは言うこと聞かないとこのまま続くと思ったので大人しく食べた

目の前にいた、両親2人はみさえは微笑ましそうにひろしは自分も口を開けて羨ましそうにしていた

夕方になりななこさんが帰った後、目が覚ましたしゅんのすけしゅんのすけはななこおねえさんが帰ったと聞き、リビングで丸くな

り拗ねた。

「だっていくら起こしてもあんたが起きなかつたんだもん」

「またそのうちおねえさん来るってさだから元気出せな」

「いつ来るかわからないけど・・・」

つとじゅんの最後にとどめを刺し、また拗ねたが次の日は元気になつた

北海道へひとつ飛び前編

遅い夏休みを取ったヒロシは明日から家族連れで北海道へ行く予定だ

「北海道ではのんびり優雅に過ごしましょう」

「明日は6時に起き7時に家を出て10時半の便に余裕をもって乗ろうじゃないか」

「でも今11時だよ、寝なくていいの？しんなんか今からテレビ見ようとしてるよ、オレは先に寝るね」

しんのすけはテレビをつけ、深夜のお姉さんがでてる番組をデレデレしながら見ていた。それを見たじゅんはみさえ達に言ったから寝ると。みさえはしんのすけにゲンコツを落とし、テレビを消した

「とゆうことでもう寝ましょう」

「同感だねおやすみ」

翌日

じゅんは朝5時半に起きシロのさんぽに行きシャワーを浴びヒロシとみさえを起こしたが起きる気配がなく、何度も起こしたが起きず諦め1人で朝ごはんを食べていた

8時になりみさえとひろしは起きた

「でーっあなたもう8時よーっ」

「なにーっ!?目覚まし時計セットしたのかよお」

「ちゃんと6時に鳴ってたけど父ちゃんアラーム消してたよ」

「じゅん!じゃあなんで起こさなかったのよ」

「いや。起こしても全く起きる気配なかったよ」

「と、とにかく急いで支度だ!!?」

「(ごまかしたな・・・)」

「しんのすけも起きなさい」

じゅんはシロを隣のおばさんに預けて行き、家族4人は急いで駅に向かった。

駅に走って向かう途中

「ところで航空券持ったろうな」

「えっ!?やだあたし持ってないわよ」

2人は航空券を互いに持つてると思っていたが、2人はどちらも持つておらず、頼みのじゅんをみたが

「はあーオレも持つてないよ。てか子供頼りつて親的にどうなのよ」

じゅんに冷たい目で見られながら毒を吐かれた

「あなたかじゅんが持つていってってくれるかと思つて・・・」

「・・・たたくしようがねえな取つてくるよ」

「テーブルの上に置いてある飛行機の絵の付いた封筒よーっ!!?」

「わかつた!!?」

ひろしが来た道に戻り家に走つて戻ると、しんのすけが股から飛行機の絵の封筒を出した

「おおっそれと同じのオラも持つてるぞ」

「あなたここに有るわ!!?ちきしょうおお」

ひろし達は飛行機が着くギリギリの電車に間に合つたのだが、車両事故のため電車が15分遅延した

電車に乗り込み、4人は電車に座つた時ひろしが

「電車内でいくらあせつてもムダだそれより今のうちに眠つて体力を温存しておこう!!?そして浜松町に着いたら猛ダツシユで1本でも早いモノレールに乗るんだ!!?」

「だれのせいで体力使つたんだよ」

「そーだそーだ」

「はいすみません。。。つてお前もだろ」

じゅんはこれ以上遅れて駅を乗り過ごしてはいけないと思い、念のため1人だけ起きていた。案の定着く直前になり起きる気配も無くじゅんは起きてて良かったと思ひ3人を直前で起こした。電車を降り、モノレールに乗りもうすぐで羽田空港に着こうとしていた

「羽田に着いたらダツシユね荷物は私が持つわ」

「しんのすけとじゅんはオレが抱く!!?」

「オラは父ちゃんに抱かれる」

羽田空港に着きじゅんとしんのすけはひろしの両肩に乗せられ走って移動したがしんのすけは目の前にあるひろしの耳を舐めた

「ああ・・・ん」

「き、気持ち悪い声出すなよ。父ちゃん。。。」

「なに感じてんのよんなどで」

ひろしはしんのすけに耳をやられ倒れ、じゅんはひろしの感じた声を聞き気持ち悪くなり、しんのすけはみさえにゲンコツされた

「パパは耳感じやすいんだからさわるんじゃないの!!?」

「(こいついい舌技もってやがるぜ)」

野原一家のおかげで離陸が17分遅れた

野原一家が飛行機に入ると乗務員全員が睨んでいた

「(うわーっみんなのひんしゆくかかってる)」

「(注目されてる)」

「(オレは他人のふりしとこ)」

しんのすけは注目されると興奮するタイプなので

「みんなオラを見てるいえーい!!?」

「しんちゃん早くすわるのよ」

「(子供になりたい　あれ?じゅんは・・・あのヤロー他人のフリしてやがる)」

飛行機のアナウンスが流れ、シートベルトをして座る。座席はみさえ、しんのすけ、ひろしとしんのすけを挟む感じで座っており。しんのすけは色々と面倒を起こすので両親が間に入りじゅんはしんのすけよりも迷惑をかけずむしろ大人2人より面倒事起こさないのじゅんは通路を挟んだ席に座っていた。しんのすけとひろしの前にはスチュワーデスのお姉さんが向かい合わせで座っていた

ヒロシは目の前スチュワーデスのスカートの中を

「(おっと!目のやり場に困るぜ・・・外を見るふりして・・・)」チラ

しんのすけは自分の席を離れひろしの目線の先のスチュワーデスのスカート前に顔を出すとヒロシとばっちりと目が合った

「あーっやっぱりお姉さんのおまた見た」

「でーりーっ」

みさえは素早くしんのすけを捕まえ、ゲンコツを落としヒロシにはシートベルトをしているのでお仕置きができずしんのすけだけたんこぶができた

「しんちゃんおとなしくすわっててね。あなたあとでゆっくりお話ししましょうね」

「は、はい」

飛行機が飛んでいるとすこし揺れ、スチュワーデスさんが体制を崩し、しんのすけのほっぺに唇が当たった

「ご、ごめんなさい」

「そ、そんなにオラが好きだったのかあ」

「ちがうちがう」

「ふあ〜っ」

じゅんは朝から早くからシロの散歩などやり、電車に間に合わないということで走り、電車でも1人だけ起きていたのでじゅんは体力の限界で飛行機の席に着くとすぐ寝てしまったが寝ている途中で隣のしんのすけ達の声で目が覚めてしまい。そういえば朝から何も飲んでいないことに気づき、隣にいたスチュワーデスに

「すみませんスチュワーデスさん！お茶をもらえますか？」

「あ、はい！ただいまお持ちします」

「じゅん！オラの女を使わないでくれたまえ！」

「はっ？」

スチュワーデスはお茶を持ってきてくれたのだがしんのすけはなぜか、ほっぺに口紅をつけたまま、背中に張り付いておりみさえが離そうとしてもくっついたまましんのすけを見て、じゅんはなにがあったのかを察して

「しん！このお姉さん彼氏持ちらしいよ。ねえお姉さん？」

「・・・はいっ！そうなんですよ、もうラブラブ」

じゅんはお姉さんにウインクし、しんのすけを大人しくするための嘘をついてもらい。お姉さんもそれに気づき、それに乗っかる事にした

「ぬおおおっー。そ、そんな。。。」

しんのすけはそれを聞いてショックになり、うるさかった機内は静かになった。

「(よし！これで静かに寝られる)」

「あ、先程はどうも、これサービスです」

スチュワーデスからクツキーをもらい。北海道まで機内は平和だった。

北海道へひとつと飛び後編

飛行機をおり

俺たち家族は北海道の札幌に来ていた

みさ「食べ歩きしたい」

ひろ「とにかくなにかく食べよう。ハラへったよ」

俺たち家族4人は着いてからすぐお昼について話おり、まず一人一人何が食べたいか言うことにした

母ちゃんは「トウキビとジャガイモ」

父ちゃんは「いやぜつたいラーメン」

オレは「いやいや海鮮丼!!?」

しんは「オラはんくん。えと・・・」

しんはまだ何が食べたいのかを迷っており、俺は旅行に行く前から父ちゃんのパソコンで調べたお店に絶対に行きたいと思っており、父ちゃん母ちゃんにもここに行きたいとあらかじめ1週間前から言っていたのだが覚えてないようだ

4人は周りの目を気にせず、大声で言い争って周りに野次馬ができて始めてきていた。

みさ「ジャンケンで勝った人の希望を優先させましょう」

ひろ「よっしゃ」

じゅ「絶対く負けねえく!」

しん「ジャンケン」

母ちゃんと父ちゃんがぐーをだし、おれとしんはパーをだし、俺とシんだけの2人勝ちをした。

俺とシんは睨み合っていた

じゅ「しん!真剣勝負だからな、」

しん「兄に勝とうなんて100年早いぞく」

2人のジャンケンは5分間ずっとジャンケンがあいこが続き・・・結果はしんが勝った。

しんがお昼選んだ場所は埼玉でもあるマクドナ○ドだった

ひろ「なんでわざわざわざわざ北海道まで来て、最初にハンバーガー食わ

なにやならんのだ」

みさ「埼玉にあるだろうが」

じゅ「くそく。あの時パーを出していれば。。。」

しん「うん、おいしいね」

次はしんを除いた3人がジャンケンをし、足くさ父ちゃんが勝つた。

父ちゃんが行きたい所はガイドブックにも書いてある、ラーメン屋で特に味噌ラーメンが美味しいらしい

ひろ「絶対ラーメン食べないと気がする」

みさ「ここは、ガイドブックにもものっているお店ね」

じゅ「店の外からでもめっちゃいい匂いする」

しん「おいしい店・・・」

店「いらつしやいませ」

俺たちは店に入り喫煙席の4人席、机の上にあったメニューを見て、決めた。オレは絶対に海鮮丼を食べると決めていたため、さっきのマクドナ○ドに行った時もほんの少ししか食べてなく、今回も1分量が少ないやつに決めた

ひろ「みそバターコーンチャーシューラーメンね」

じゅ「お子様ミソラーメン」

しん「オラはミソバツタポップコーンチョコビホットケーキラーメンね」

みさ「そんなのないない」

しん「じゃあカツ丼」

みさ「それもない」

ひろ「そうそう、こーゆ有名なお店はラーメンの味に自信を持っているから他のメニューはやらないんだぞ」

じゅ「いやそんなことないよ！ほらそこみて」

俺が指を刺した先の壁には店のメニューの張り紙が貼ってあり『カツ丼はじめました』と大きく貼ってあった

それを見た父ちゃん母ちゃんは顔を赤くし、店員さんにも丸聞こえだったらしく、気まずい空気が流れた

ひろ・しん「ふうー食った食った」

みさ「じゃあ次は私の番よ！トウキビとジャガイモ」

じゅ「ちよつと待った!!? 海鮮丼は??」

みさ「私のつきよ！いいじゃない、お楽しみは最後に取っとけば」
ひろ「えーっ!? まだ食うの? ハンバガーとラーメンのあとじゃきついよ」

その言葉を聞いたオレと母ちゃんはなにかが切れた

みさ「あなたはいいわよね!!? やれ飲み会だ、社内旅行だ、ゴルフだでそのたびに美味しいもの食べて」

じゅ「そうだ。そうだ。しかも俺1週間前からずっとく楽しみにしてたの知ってるのに、北海道着いたら自分が食べたい物食べたら満足ですか。そうですか。」

ひろ「声がでかいよ」

ふっわぎと、大きく言ってるんだよ。ほら周りがこちらを見始めてきたぞ

みさ「あたしと子供はいつもの残り物、着のみ着のまま」

じゅ「帰ってきた父ちゃんの靴下を洗わされ、たまに匂いで気絶するし」

しん「さむいよ母ちゃん」

しんもノリが良く乗ってきてくれ、俺たち家族の周りには人だからできていた。それを見た父ちゃんが

ひろ「わかった、わかったよ!!?」

俺たちの作戦がうまくいき、とうきびを食べるため

大道公園にやってきた

ここにはハトがいっぱいおり、とうきびをハトにあげる人も多いため
たいだ

俺たちは1人一本ずつ買ってもらえた

ひろ「うまい」

みさ「ホクホクしておいしい」

じゅ「俺はこのくらいで後はハトにあげようかな・・・」

俺は半分くらい残しハトにとうきびをあげようとしたら、しんがとうきびを自分の股に挟み、ハトに餌を与えていた

じゅ「・・・ぷっ！はっはっは、なにやっつてんだあいつ・・・」

ひろ「なんだなんだ！じゅんどうした？」

みさ「急にどうしたのよ、笑い始めちゃって」

じゅ「し、しんが・・・ひーっひっー、もうだめ、」

俺は笑いすぎて上手く喋れなかったが父ちゃんと母ちゃんには伝わったようだしんを探すとちょうど2人同時に見つけた、しんを見た2人は口に入った、とうきびをマシンガンの様に飛ばした

ひろ・みさ「「ぶーっーっ」

しん「や、やさしくしてね」

母ちゃんはしんをげんこつをし、ノックアウトさせ、俺としんを抱えてその場から逃げた

みさ「ったく！ろくな事しないんだから」

ひろ「早くここを去ろう」

じゅ「しん、どうだった？」

しん「気持ちよかったぞ」

その後、海鮮丼を食べ、アイスクリームやビール園など行き、俺たちは腹が痛くなり何かあたってたかと、特に母ちゃんが尋常じゃないほど痛がっており、4人で最後に行ったのが、札幌病院

医者「食べすぎですな」

家族「「は、はい」」

医者「特に奥さん、あなたが一番やばいです。どんだけ食べたんですか、大食いの人じゃないんだから。念のため入院しときましようか」

じゅ「ぶっぶっ」

やめろ、そんな真顔で言うな。俺と父ちゃんは笑ってはいけなないと本能的にわかっており絶対に笑ったら、母ちゃんにどんな目に合わせられるか、想像するだけでも震え始めてくる。俺と父ちゃんは手で口を塞ぎ笑いを我慢してるとしんが

しん「このままみさえのオケツは十勝牛」

ひろ・じゆ「ぶっはははは……あ」

母ちゃんは俺たちの後ろで怒っており、俺たち3人の記憶はそれ以降覚えておらず、目が覚めた時にはすでに予約してあった旅館に着いておりは男3人で泊まることになり、母ちゃんは病院のベットに寝たのだった